

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Long-Term Outcomes After Therapeutic Induction in Patients
with Functional Dyspepsia

(機能性ディスぺプシア患者における治療導入後の長期転帰)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻 器官・代謝制御系

消化管疾患学 (指導教授 新崎 信一郎)

氏 名 北野 隆之

背景：機能性ディスぺプシア (functional dyspepsia : FD) 患者では、心理的因子が症状や健康関連 QOL (health-related quality of life : HR-QOL) に影響することが知られている。しかし、治療導入後の長期経過や、治療導入前の心理的因子が治療効果に及ぼす影響については、十分に検討されていない。本施設共同研究では、治療開始後 3 年間にける FD の長期経過と、治療抵抗性に関連する因子を評価した。

方法：Rome IV 基準に基づき FD と診断され、上部消化管内視鏡検査により器質的疾患がないことが確認された 111 例を対象として、後ろ向きに解析した。一次治療として酸分泌抑制薬、消化管運動改善薬または漢方薬である六君子湯を使用し、治療抵抗例に対する二次治療として抗不安薬または抗うつ薬を用いた。消化器症状、心理的苦痛および HR-QOL は、それぞれ Gastrointestinal Symptom Rating Scale (GSRS)、Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS) および Short Form-8 を用いて評価した。症状改善は、治療開始後 1 年および 3 年の時点で評価した。

結果：FD 患者 111 例における症状改善率は、治療開始 1 年後で 50.5%、3 年後で 80.2% であった。1 年後では、症状非改善群における治療前の GSRS 下痢スコアおよび HADS 抑うつスコアは、症状改善群と比較して有意に高値であった ($p < 0.05$)。また、3 年後では、症状非改善群における GSRS の逆流 ($p < 0.05$)、腹痛 ($p < 0.001$)、消化不良 ($p < 0.01$)、下痢 ($p < 0.05$) および総スコア ($p < 0.001$)、ならびに HADS 抑うつスコアは、症状改善群と比較して有意に高値であった。多変量解析では、治療前の HADS 抑うつスコアおよび GSRS 腹痛スコアが、症状非改善に関連する独立した因子であった。ROC 解析によるカットオフ値および AUC は、HADS 抑うつスコアではそれぞれ 9.5 および 0.709、GSRS 腹痛スコアではそれぞれ 3.5 および 0.713 であった。

結論：FD 患者では症状改善に時間を要するが、治療前の抑うつ症状や腹痛が強い患者では、治療効果が乏しい可能性がある。これらの因子を治療初期に評価することは、経過予測および包括的な治療戦略の立案に有用である。